

東京工業大学 正員 中村良夫
東京工業大学 学員 ○加藤信夫

1. 研究の背景と目的

古来、日本の自然美は山紫水明とも言い表わされてきたが、大都市内において今日このような風景を見る機会には次第に少なくなってきている。現在の東京の市街を見ると、高層建築がふえて、2~30メートルの地形の高差など見づかれなくなってしまった。しかしこのようにビル群に埋まってしまった東京も江戸末期までは土地の起伏が認知され、それが景観の主要なテーマとなり得ていたと思われる。東京は武蔵野台地の東端に位置し、台地を削った開折谷が発達しているのど、本来は起伏の変化が到る所で見られたはずである。そこで本研究は、台地末端に位置する赤坂、麻布地区に焦点を絞り、かつての東京がわずかな起伏でも景観的には表情豊かな地形であったことを明らかにすることを目的とする。本研究は台地末端地形の景観的重要性、多様性に対して、プランナー等の注意を喚起しようとするものである。

2. 東京の地形の概要

関東平野の南端に存在する武蔵野台地は西方に存在する関東山地から東に伸びて、東京都の市域たる山手地域に及んでいる。この武蔵野台地はほぼ矩形を呈し、その幅がりは東西45キロメートル、南北20キロメートルを有している。その主軸線方向は北西-南東で、東京の市街部の存在する台地末端部の東縁線は北々東から南々西の方向に走っている。東京はこの台地の東端部に発達した都市であるから、その市域の範囲は台地上から台地下の低地の部分まで伸びている。この台地末端の地形的特色は崖によって台地と低地に区分されていることであり、また台地の平坦面を掘り込んだ無数の開折谷の存在である。

3. 地形地名

現在ではほとんど忘れられてしまった地形地名を調べることは、東京の原地形を採る一助になると思われる。図-1は山に関する地名の分布を示したものであるが、過去に山と呼ばれた所が多かったことがうかがえる。現在では磐岩山の名が残るだけであるが、この磐岩山もビルに埋まってしまった観がある。このような地形地名の中で現在でも使われているものは少いし、使われていたとしてもその名が示す地形空間が現実に存在する所はほとんどないと言っても過言ではない。山に見える台地が高いビルに囲まれれば山とは呼ばれなくなるだろうし、河に蓋をして暗渠にすれば河という地名はなくなるだろう。しかしながら現在でも残っている地形地名があれば、それは貴重な地形考古

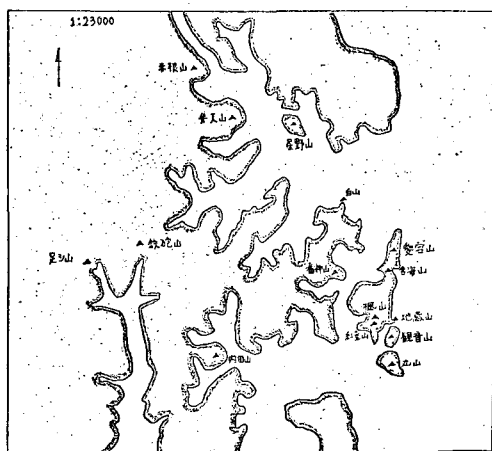


図-1 山に関する地名の分布

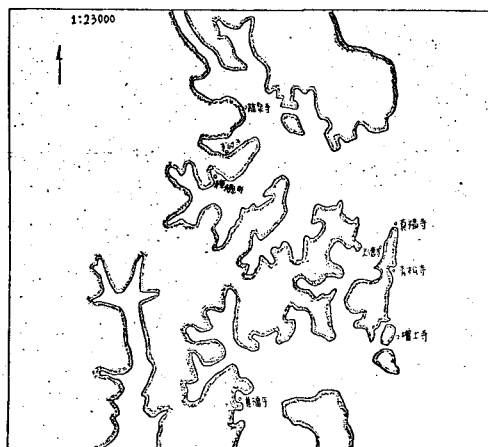


図-2 寺院に関する分布

的遺産といわねばならない。

4. 寺社の立地選好

地形と人間の精神的な関係は、信仰という形で寺社の立地に代々あらわされてきた。図-2は江戸名所図繪にあげられた寺のうち、明暦の大火以前に立地していた寺の分布を示したものである。このように寺は台地のすぐ下とあり、背景に台地をしかえた所に立地していたといえる。寺の立地選好としては以上のようなことがわかるが、一方神社の立地選好としては台地のよであることが同様な地図にプロットして見てわかる。これらの寺社が名所的な性格を有していたのは、台地末端の印象的な地形特性による所が大きいと思われる。

5. 台地末端の景観の特徴

本研究における景観のとりえがたは、透視形態論の範疇に入るといえる。一般に台地末端の景観は台地の上がフラットなため後地からのながれも台地を単に高台と認識しているにすぎないといえるが、透視形態論的な説明を用いると視点の位置によっては台地末端が山に見える場合があるのである。なおここで示す透視図は、1893年の陸軍陸地測量部作成の1/5000地形図による25m間隔のDTMを用いている。

図-3の地形図に太線で示した台地突端部を、100m離れ、高さ12mの視点から透視図にあらわすと、図-4のようになる。台地上はほぼ平坦でピークは存在しないが、このように視点が近いと山に見える

ということがわかる。また透視図は同じ集さのペンで描いていることや、植生の影響を考慮すれば、実際はさらに山らしく見えると思われる。このように台地末端は視点の位置により見え方が変わり、場合によっては山に見えることがわかる。つまり地形学的な概念としての山岳に対し、地形の透視形態論を通じて見いだされる景観論的な山概念を峻別し、これに注意することが必要である。

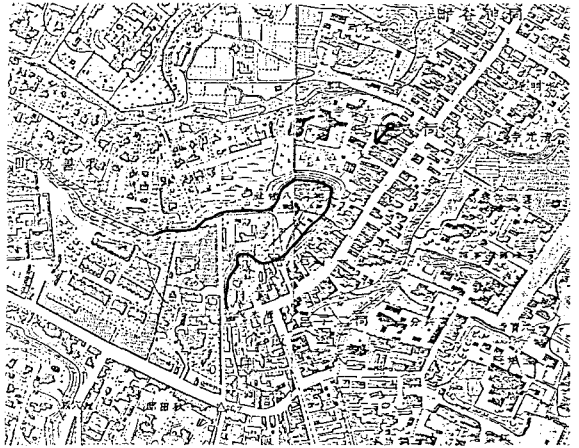


図-3

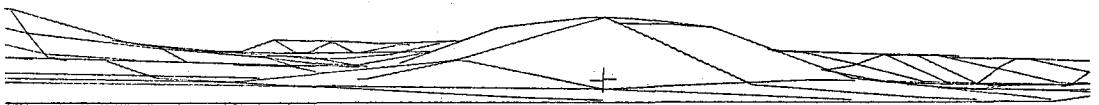


図-4

6. 結論

- (1) 透視形態論上において、台地末端地形はその視点の位置により山に見える。
- (2) かつての東京はわずかな起伏でも山と川の風景をもった町であった。
- (3) 多くの寺社・名所などは、台地末端の地形的特徴をもった所に立地していた。

7. 今後の課題

- (1) 本研究は山の見え方に焦点を絞ってきたが、さらに谷のような俯瞰景の透視形態や地形の破壊過程に関する研究が今後望まれる。
- (2) 現実に目を向けると、今でも開発があまり進められていない台地末端地形に対して、本研究のような景観的配慮が必要と思われる。例として、多摩丘陵、北総台地などをあげることができる。